

北の土偶

国宝に指定されている「中空土偶」、「縄文のビーナス」及び「合掌土偶」の三体が一堂に揃って公開される「北の土偶展」が、来年3月、開拓記念館で開催されます。

北の土偶3体について、ごく簡単に説明しておきます。

「中空土偶」は、函館市著保内野遺跡から1975年に出土し、2007年に国宝に指定されています。

「縄文のビーナス」は、長野県茅野氏棚畑遺跡から1986年に出土し、1995年に国宝に指定されています。

「合掌土偶」は、青森県八戸市風張遺跡から1989年に出土し、2009年に国宝に指定されています。

この国宝土偶三体が国内で揃うのは、2年前東京国立博物館で展示されて以来、初めてのことであり、「北の土偶展」は見る人々にとって、縄文文化の素晴らしさに触れる絶好の機会となるでしょう。

中でも、「中空土偶」は素晴らしいと思います。私は、これまでに二度、実物にお会いしていますが、土偶としての完成度が優れているだけでなく、表情の豊かさが何ともいえません。縄文の人々が、どのような思いでこの土偶を作ったのかなど、想像が膨らみます。

北海道の噴火湾沿岸には、「中空土偶」が発掘された著保内野遺跡の他にも北黄金貝塚や大船遺跡があり、青森県には三内丸山遺跡、岩手県には御所野遺跡、秋田県には大湯環状列石といったように、多数の貴重な縄文遺跡群が存在しており、それらの遺跡を通して、北海道と北東北地域には海峡を越えた交流・交易が活発に行われていたことが分かっています。

このため、2003年9月に開催された北海道・北東北知事サミットにおいて、北海道と北東北が、縄文時代から深く交流してきたことを踏まえながら、両地域が一体性を持つ地域として連携し発展することを目指して、「北の縄文文化回廊づくり」を推進することが合意されました。

その後、この合意を受け、北海道・北東北地域において縄文文化遺産の保存

などの活動をしている民間団体などが結集して「北の縄文文化回廊づくり推進協議会」が設立され、地域間交流や情報発信が進められています。

その中でも重要な取り組みは、北海道・北東北を中心とする縄文遺跡群の世界遺産登録に向けた取り組みでしょう。もしそれが実現したら、新たな縄文ブームが起きるに違いありません。

縄文時代は、今から約1万数千年前に始まり、約1万年間続いています。その間に、土器が出現し、竪穴住居が造られ、貝塚なども残されていますが、その出土品などから、縄文時代の人々は、自然と調和しながら、かなり豊かな生活をしてきたことが伺われます。

伊達市噴火湾文化研究所の大島所長は、「縄文人が一万年もの間狩猟採集社会を続けたのは、自然を開拓する技術がなかったからではない。あえて開拓しないという強い意志があったからに違いない。さらに、北海道の縄文文化が本州に比べて重要な点は、その高い精神性が続縄文文化、アイヌ文化へと受け継がれたことにある。」と述べておられます。

福島第一原発事故は、我々が如何に大量の電気を消費してきたかを、再認識させる結果となりました。現在、全国の休止中の原子力発電所は再稼働が困難な状況にあり、各地では電力不足に対応するため節電が求められています。この機会に、これまでのような、大量生産・大量消費という高度経済成長時代に身に付いた生活の仕方、もっといえば生き方そのものを見直してみても如何でしょうか。とはいっても、今更縄文時代の生活に戻れるはずはありませんが、自然と共生し、自然の恵みの中で豊かな生活を享受してきた縄文人の生き方、自然観から学ぶことは多いと思います。

是非、来年の3月には、中空土偶はじめ縄文のビーナスや合掌土偶にお会いして、縄文人の心に寄り添ってみたいと思っています。(塾頭 吉田 洋一)